

No.3123

The 3rd International Workshop "Hate Speech in Asia and Europe: Pandemic, Fear, and Hate"の開催

立命館大学国際関係学部 准教授  
金友子

2021年8月27日、28日の2日間にかけて「The 3rd International Workshop "Hate Speech in Asia and Europe: Pandemic, Fear, and Hate"」を実施した。参加者は1日目が29人、2日目が25人、発表本数は計15件であった。アジア・オセアニア諸地域をはじめとする12か国の研究者がヘイトスピーチに関する報告をおこない、討論した。主催は立命館コリア研究センター（日本）、共催団体はソウル大学言論情報研究所（韓国）、Université de Paris のLCAO-CCJ（フランス）である。

コロナ禍により全面オンラインでの実施になったことを受けて、発表者は事前にペーパーを提出したうえでプレゼン動画を作成し、指定討論者および参加者は、事前に報告動画を見て、当日はコメントおよび質疑応答と討論のみをおこなうことにした。

ワークショップ1日目には、日本でヘイトスピーチに関して研究・活動をしている3人のゲストを招聘し、ラウンドテーブルを開催した。中村一成氏は、京都での朝鮮学校襲撃事件以後の状況について、郭辰雄氏はヘイトスピーチに関する日本の法制度の現状と課題について語り、金明秀氏は日本においてレイシズムの認識そのものが薄い点を指摘した。

今回のワークショップで焦点を当てたのは、コロナ禍でのアジア人差別である。世界各地で中国人ないしアジア人（に見える人々）を標的にしたヘイトスピーチが、オンラインを含む人々の生活領域に拡散し、また、その発信主体も、政治家やマスコミといった影響力をもつ媒体から一般人に至るまで、様々であることが確認された。こうして表面化したアジア人差別は、当該社会の既存のステレオタイプや偏見を利用し、それらを増幅させる形でおこなわれている。また、感染症という危機への社会防衛的対応として、既存のマイノリティグループ（女性、同性愛者、インドにおける被差別カーストの人びとなど）に対する差別と排除が正当化されるという事態が生じていることが明らかにされた。